優れた指導者にめぐり逢えて

前光高校監督　佐　浦　益　子

私とバスケットボールとの関わりは、「今日の放課後、残っておくように」の一言からはじまりました。

放課後のコート上は、正確なランニングシュートを難なくこなしながらも、緊迫感あふれる雰囲気でした。あの一言の先生は、強豪の「お茶の水女子高」を倒して国体ベスト４をかけて闘ったという実績のある体育教師でした。熊毛南高がこうした伝統と実績のあるチームとは全く知らずに翌日から練習コートに立ちました。中学時代の経験のない私には、早速、特別にマンツーマンで教えてくれるコーチが一名つきました。ボールの持ち方からはじまり、技の習得の最短コースを辿りながら、回り道なくゲーム運びや、ルール勉強も、そしてコートマナーも指導を受けました。入学から十ヶ月は進学のことはお預けで、バスケット三昧の高校生活でした。県新人戦では、ポイントガードでコートに立ちました。早期栽培の選手でした。一対一で細かく教えて貰ったことが、後に指導者として大きな財産となりました。当時、卒論をかかえながらも指導に当たってくださった方が、松本正先生（協会史編纂委員長）です。

やがて高２を迎えた時、九州大会での優勝チームをおいて、山口県に転任されたばかりの和佐本先生と出逢えたことは好運でした。谷監督と若い和佐本コーチのティーム・ティーチングは、その後の私の教師業にしっかり生かすことができた訳です。当時とはいえ、スポーツテストの授業からスカウトされ、経験のない私はスタッフにとって大きな負担だったと思います。何故か２学年が一名で、新人戦から１年生の起用というチーム事情があり、縦社会を意識し鍛えられたことは貴重な体験でした。時は昭和30年代、青木進先生・山高と和佐本先生・熊毛南高と水嶋先生・大津高、そして白松先生・長府高時代でした。県内の日本公認審判は２名（水嶋、和佐本）、高２（昭和29）の夏は秋田インターハイへ男子の大津高とともにの出場でした。一回戦敗退でしたが、相手チームの岡崎女子高は女性監督でした。次のゲーム審判は、熊南（和佐本）と岡崎女（矢田）のレフリーで主審は女性でした。その闊達で自信あふれるホイッスルは印象的でした。後に矢田先生のご高名を知り秋田インターのご縁を静かに大切にしています。

高３の夏は白松・長府高に無念にも敗れ、勝負の厳しさを味わうと同時に、私の進学先まで尾を引きました。すでに、中国大会（第１回福山市）出場から50余年ですが、当時は島根県の安来高が段突に強いチームで、その練習メニューのスクェアー・パス・ランが特に注目されていました。安来高はその年の国体、インターハイの二冠チームでした。また、秋田インターハイでは岡山県の就実高の優勝カップ返還に、中国ブロックのレベルの高さを感じたものです。

山口県のチームも、全国レベルのチームに王手をかけるまでに40年近くかかりましたが、いよいよ凄いスタッフの登場で、国体では全山口チームが技倆錬磨と強いスクラムで高い結果を出しました。非常に喜ばしいことです。我が子はミニ・バスケから高校までバスケットを続け、その父親もまた指導者であり、そんな中で大きな家族愛と深い理解に守られつつ、私のバスケット人生は元気に幕を閉じました。この道で関わった方々との交流はそのまま、どこかで連なっております。地域の人とのかかわりや人づくり、人材育成など、全てこの道に共通点があり、プロジェクトづくりにも役立てながら、ボランティア活動に生かされています。

作戦盤どおりにいかなくても、次のチェンジオブペースで解決策を見出していく度胸は培われています。今後とも、バスケットにかけた時間を無駄にしないで、人生の変化に対応できるフォーメーションを描いて歩いていきたいものです。凄い師、素晴らしいスタッフ、たくさんの同志に心から感謝しながら。